横浜ゾリステン　～指揮者のいないオーケストラ～

平成２５年１１月２日（土）　　神奈川県立音楽堂

プログラム

チャイコフスキー「エフゲニー・オネーギン」作品24よりポロネーズ
チャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」作品35（独奏：鷲見恵理子）

―休憩―

チャイコフスキー「白鳥の湖」作品20より抜粋
前奏曲
【第1幕】情景、ワルツ、パ・ド・ドゥ
【第2幕】情景、白鳥の踊り、グラン・アダージョ
【第3幕】ハンガリーの踊り、スペインの踊り、ナポリの踊り、マズルカ
【第4幕】情景、終曲

本日はご多忙の折、横浜ゾリステン～指揮者のいないオーケストラ～2013年秋公演にご来場くださり誠にありがとうございます。団を代表し厚く御礼申し上げます。　横浜ゾリステンは2009年秋に結成されたプロフェッショナル・オーケストラです。同年11月にベートーヴェン「運命」でデビュー以降、年2回の公演活動を中心に、アンサンブル重視の演奏活動を続けています。

さて、今宵はチャイコフスキープログラムです。なかでも「ヴァイオリン協奏曲」は世界で活躍されているヴァイオリニスト鷲見恵理子さんと協演いたします。是非ともお楽しみいただければ幸いです。横浜ゾリステンは常に高度なアンサンブルによる質の高い音楽をお届けできるよう、今後も活動を進めてまいります。引き続きよろしくお願い申し上げます。

横浜ゾリステン事務局長　住田英二

◆プログラム解説

オペラ「エフゲニー・オネーギン」作品24よりポロネーズ

「エフゲニー・オネーギン」作品24はアレクサンドル・プーシキンの韻文小説『エフゲニー・オネーギン』が原作。本日はその中から第3幕、第1場 サンクトペテルブルクの大舞踏会で演奏されオペラ以外でもよく演奏される。

「ヴァイオリン協奏曲」作品35

1878年に作曲されたヴァイオリンと管弦楽のための協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスのいわゆる3大ヴァイオリン協奏曲に本作を加えて4大ヴァイオリン協奏曲と称されることもある。ヴァイオリン協奏曲をニ調（ニ長調、ニ短調）で作曲した作曲家には、チャイコフスキーのほかにベートーヴェン、ブラームス、ラロ、シベリウス、ストラヴィンスキー、コルンゴルト、ハチャトゥリアンなどがいるが、ヴァイオリンという楽器の特性としてニ調（ニ長調、ニ短調）が一番よく鳴る構造を持っていることも考慮されたと見られる。

「白鳥の湖」作品20より抜粋

□序奏

オデットが花畑で花を摘んでいると悪魔ロットバルトが現れ白鳥に変えてしまう。

□第1幕「王宮の前庭」

今日はジークフリート王子の21歳の誕生日。お城の前庭には王子の友人が集まり祝福の踊りを踊っている。そこへ王子の母が現われ、明日の王宮の舞踏会で花嫁を選ぶように言われる。まだ結婚したくない王子は物思いにふけり友人達と共に白鳥が住む湖へ狩りに向かう。

□第2幕「静かな湖のほとり」

白鳥たちが泳いでいるところへ月の光が出ると、たちまち娘たちの姿に変わっていった。その中でひときわ美しいオデット姫に王子は惹きつけられる。彼女は夜だけ人間の姿に戻ることができ、この呪いを解くただ一つの方法は、まだ誰も愛したことのない男性に愛を誓ってもらうこと。それを知った王子は明日の舞踏会に来るようオデットに言う。

□第3幕「王宮の舞踏会」

世界各国の踊りが繰り広げられているところへ、悪魔の娘オディールが現われる。王子は彼女を花嫁として選ぶが、それは悪魔が魔法を使ってオデットのように似せていた者であり、その様子を見ていたオデットは、王子の偽りを白鳥達に伝えるため湖へ走り去る。悪魔に騙されたことに気づいた王子は嘆き、急いでオデットのもとへ向かう。

□第4幕「もとの湖のほとり」

破られた愛の誓いを嘆くオデットに王子は許しを請う。そこへ現われた悪魔に王子はかなわぬまでもと跳びかかった。激しい戦いの末、王子は悪魔を討ち破るが、白鳥たちの呪いは解けない。絶望した王子とオデットは湖に身を投げて来世で結ばれる。

◆鷲見恵理子（ヴァイオリン協奏曲ソリスト）

Ⓒ 岡村啓嗣

東京に生まれる。祖父鷲見三郎氏は日本ヴァイオリン界の発展に大きく貢献した名教師。両親もヴァイオリニストという文字 通りヴァイオリン一家に育つ。3歳から祖父、両親より正式にヴァイオリンを学ぶ。1989年に渡米、ジュリアード音楽院プレカレッジに入学。1994年にジュリアード音楽院に入学しドロシー・ディレイ、室内楽をパールマンとの共演で名高いサミュエル・サン ダース各氏に師事。同年ヴァイオリニストの登竜門であるミケランジェロ・アバド国際音楽コンクール（イタリア）にて優勝。 1998年ジュリアード音楽院卒業。その後、カーネギー・ホールにてニューヨーク・デビューリサイタルを開催。ニューヨーク　エヴリフィッシャー・ホールにて演奏。海外においては、アメリカ、イタリア、オーストリア、北欧、ブルガリア等で活動。ポーランド国立放送交響団、ソフィア国立フィルハーモニック、ロイ ヤル・メトロポリタン・オーケストラ、キエフ室内管弦楽団、サンレモ・シンフォニーオーケストラ、ハンガリー・ヴィルトーゾ・チェ ンバー・オーケストラ等、多数のオーケストラと共演。また、ウンベルトジョルダーノ音楽祭（イタリア）やマンデラーマイスター音 楽祭（ドイツ）等にも出演。日本では、サントリーホール、東京国際フォーラム、オペラシティ武満メモリアルホール、紀尾井ホール、東京文化会館小ホール等での公演の他、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー、東京ロイヤル・メトロポリタン・オーケストラ トウキョウ・モーツアルトプレイヤーズ等と共演多数。林真理子原作ＴＢＳドラマ「不機嫌な果実」に出演した。・ルクセンブルグ皇太子ご夫妻の前で演奏。2006年ブルガリアで同国最高峰オーケストラのソフィア国立フィルハー モニーとサラサーテのカルメン幻想曲を収録、2007年アリチェ・ベルコレイタリア国際音楽祭にて優勝、2009年ミラノ国立ヴェ ディ音楽院サーラ・ヴェルディにてオーケストラ・アカデミア・デレ・オペレと共演。同年ハンガリー・ヴィルトーゾ・チェンバー・オ ーケストラとブダペストのハンガリー国会議事堂にて日本人として初演奏。これまでに国内外の新聞で、「男性的とも言われる力 強さ、かつロマンティックな演奏に定評がある（朝日新聞）」、「鋭さ力強さ、陰影の深さが彼女の演奏スタイルを特徴付けている（神 戸新聞）」、「彼女のバッハのシャコンヌにおいては心身をすり減らす精神性量感があり、蜜で、包み込む音は作品の基石を際立 てており、ポリフォニーを完全にマスターしている。光り輝く作品構成と純粋な思考に満ちたきらめくドラマ性にも繋がった。（イ タリア・コリエレ・デラ・セーラ紙）」と絶賛された。現在イタリア・ミラノに在住し、イタリアやオーストリアを中心に活動。ミラノにてトレッタ賞受賞。鳥取県のふるさと大使に任命される。イタリア・コルティナ・ダンペッオにてディノ・チャーニ音楽祭に出演。その際マスタークラスを行い後進の指導にもあたる。近年アバドコンクール審査員を務める。エドワード・ウルフソンに師事し、彼の師であるメニューイン、ミルシュタイン、シェリング等の教えを受けた。

◆水村浩司（横浜ゾリステンコンサートマスター）

第50、55回全日本学生音楽コンクール名古屋大会第1位。東京藝術大学音楽学部器楽科及び同大学大学院修士課程卒業。これまでに北垣紀子、故久保田良作、澤和樹、山口裕之、松原勝也の各氏に師事。大学在学中から東京シティフィルハーモニックその他数々のオーケストラとヴアイオリン協奏曲を共演する。オーケストラ奏者としても名古屋フィルハーモニー交響楽団のゲストアシストコンサートマスターをつとめ、2011年に全日本選抜ユースオーケストラのゲストコンサートマスターとしてウィーン国立オペラ座で公演。横浜ゾリステンコンサートマスター、東京室内管弦楽団首席奏者、クライネスコンツェルトハウス弦楽四重奏メンバー。

◆横浜ゾリステン演奏者
フルート：長崎亜星、小津まゆみ、高橋有紀
オーボエ：中山達也、小倉悠樹
クラリネット：木原亜土、宮前和美、池上美香
ファゴット：河崎聡、常田麻衣
ホルン：大出佳子、大平紹美、越取浩一、花房可奈
トランペット：金城和美、原育海、安田真実子、東里千春
トロンボーン：覚張俊介、武石拓海、浅岡かほり
チューバ：山科陵一
ヴァイオリン：水村浩司、土谷茉莉子、田島華乃、松田彩、武石侑子、松谷萌江、渡邉友季子
ヴィオラ：舘泉礼一、宇野友里亜、藤原有希
チェロ：苅田鉄平、山田健史、和田理、水野須美子
コントラバス：早川珠実 、田邊佑樹
打楽器：松本英之、三神絵里子、長谷川剛士、藤川敬典、向愛佳
ハープ：亀井三好

◆ソリスト直撃インタビュー（聞き手：山之内正、ヴァイオリニスト：鷲見恵理子）
―チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲の魅力はずばりどこにありますか？

＜鷲見＞　チャイコフスキーならではの魂を揺さぶる旋律が素晴らしいですね。この曲にはそれがいっぱい入っています。そして、ロシア帝国の良き時代のなごりや、民謡的な踊りのエッセンスもあります。そして、ロシア人の作曲家はロシアの土を表現する使命を持って生まれてきたと言われています。チャイコフスキーももちろんそうです。文化的には良き時代だったかもしれないけど、ロシアは大変な時代を経験していますから、ロシアの歴史を知らなければ弾けないんです。チャイコフスキー自身もガラスの心臓と言われるほどの繊細な心の持ち主だと思います。

―聴きどころは多々ありますが、鷲見さんご自身はこの曲からどんな響きを引き出したいですか。
＜鷲見＞　チャイコフスキーの音楽には「19世紀のモーツァルト」と呼ばれるほどの端正な部分がありますが、それを意識しながら構成していきたいですね。それからチャイコフスキーならではの華麗な響きのなかで音楽が流れていく情景もいいですね。ロシアの大河の流れのような音楽を作っていきたいです。チャイコフスキーの音楽の面白さはリズムと半音階が噛み合う部分にあると思います。チャイコフスキーしか書けないリズムと叙情的な部分が噛み合ったまま流れていく世界を表現できたらと思います。もうひとつ、チャイコフスキーとメンデルスゾーンの作品は品性をなくしてはいけないんです。ぬくもりがありながらも優雅さがある。ただ迫力で弾くというよりは、ウィットに富んだ表情の豊かさも意識して弾きたいと思います。

―横浜ゾリステンは指揮者がいない楽団です。これまでの演奏と違う難しさがありそうですか？
＜鷲見＞　指揮者がいればソロに集中しつつオーケストラとのアンサンブルを楽しむのが普通ですが、今回はそうではなくて、もっと全体を見る必要がありますね。オーケストレーションも勉強しなければと思い、実際に指揮科の先生にレッスンを受けました。コンサートマスターに任せっきりというのではなくて、よりダイレクトにオーケストラとの一体感を紡いでいかないといけない。バッハでは経験ありますが、いきなりチャイコフスキーというのは、ちょっと大変かもしれない。でも、やってみないとわかりませんね（笑）。

―３年前、横浜ゾリステンの録音を偶然聴かれたそうですね？
＜鷲見＞　はい。いまお話しているまさにこの場所で、どのオーケストラか知らずにブラームスの交響曲第１番の録音を聴きました。丸みとふくよかさがあって、よく歌っていて・・・、どこかヨーロッパのオーケストラかなと思ったんです。日本のオーケストラはピッタリ揃って音が研ぎ澄まされていますが、ふくよかな響きが好きな自分にとっては物足りないこともあるんです。好みもありますが、表情の豊かさとふくよかさのなかからいろいろな部分にころがせる味わいというのが私は好きなんです。音楽は基本的には歌ですから。チャイコフスキーの場合はメランコリックな歌の部分を表現したいですね。

―どうもありがとうございました。

＜山之内正プロフィール＞
東京都立大学理学部卒業、出版社勤務を経てオーディオ、音楽の両分野での執筆活動に専念。Audio Accessory、AV Review、STEREO、レコード芸術、Mostly Classicなどに執筆中。著書：『インターネットで変わる音楽作業』（アスキー）、『はじめて愉しむホームシアター』（光文社）。